



Title	主観性から見た外部所有構文における身体部位名詞の表現をめぐって：多言語的・類型論的視点から
Author(s)	フダー, クラーク
Citation	言語科学研究, 3, 77-95
Issue Date	2026-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99129
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99129
Type	journal article
File Information	03_08.pdf



主観性から見た外部所有構文における身体部位名詞の表現をめぐって—多言語的・類型論的視点から

On the Expression of Body-Part Nouns in External Possession Constructions from the Perspective of Subjectivity: A Cross-Linguistic and Typological Approach

フダー クララー

1. はじめに

本研究は、所有表現、なかでも身体部位名詞を含む外部所有構文を対象とし、言語における主観性との関連を明らかにすることを目的とする。所有という概念は、世界のほとんどの言語に普遍的に見られるが、その表現形式や意味の範囲は言語によって大きく異なる。

池上（1981、2011 など）によれば、主観性とは、話者が事態をどのように把握し言語化するかに関わるものであり、言語は主観的把握を好む言語と客観的把握を好むタイプに大別されるとされる。しかし、主観性と所有表現、特に外部所有構文との関係については、これまで十分な検討が行われていない。

本稿では、英語、日本語、フランス語、チェコ語、ロシア語、アイヌ語、トルコ語、そして中国語のコーパスデータを用いて、身体部位名詞を中心とする所有表現、特に「私は手を振る」のように、話者が自身の身体部位に直接的な影響を与える表現を分析する。そして、主観性の形態統語的指標に基づき、各言語の特徴を明らかにし、主観性が所有構文の形態統語的特徴とどのように関連しているのかを考察する。

2. 主観性と所有表現

主観性とは、認知言語学における基本的な概念の一つである。池上（2011）によれば、主観性とは話者と事態の言語化との関係を指し、言語は主観的把握と客観的把握のいずれを好むかによって大別される。主観的把握では、話者は事態の内部にいるかどうかにかかわらず、自らを経験的視点から描写する。一方、客観的把握では、話者は事態の外側に位置し、観察者の視点から事態を描写する。この違いを示す典型的な例として、池上（2008）は川端康成『雪国』の冒頭文を挙げている。

- (1) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
- b. The train came out of the long tunnel into the snow country.

(池上、2008 : 321-322)

池上（2008）はこの例をもとに、日本語と英語の根本的な差異を指摘している。日本語文では、主人公が自己を背景化し、経験者として事態を内側から捉えている。一方、英語訳には二つの解釈の可能性がある。一つは「自己並列」が行われる解釈、すなわち概念化者が自己を他者化

し、事態を外部から観察するという解釈であり、もう一つは、概念化者が主人公ではなく語り手（筆者）であるという解釈である。小説の冒頭文は語り手の視点から描かれ、その後語り手の視点が主人公の視点と融合し、主人公が語り手となるという構造である（Ikegami, 2007；池上、2020）。

では、所有表現の場合はどうだろうか。池上（1981）は、叙述所有表現における主観性の差を指摘している。Isačenko（1974）の「have-言語（H 言語）」（英語・ドイツ語・チェコ語など）と「be-言語（B 言語）」の理論に基づき、客観的把握を好む言語では“have”や「持つ」のような他動詞が使用されるのに対し、主観的把握を好む言語では“be”や「ある」のような存在を表す自動詞が使用されるとされる。

- (2) a. I have two children.
 b. （私には）子どもが二人いる。
 c. The room has two windows.
 d. 部屋には窓が二つある。 (Ikegami 1991: 299-300)

(2) では、英語と日本語の叙述所有表現の相違が示されている。話者の背景化・前景化の一般的傾向に加え、他動詞・自動詞の使用傾向や一人称代名詞の省略、定冠詞の使用などの形態統語的指標も観察される。（池上、1981；Ikegami, 1991）

2. 1 主観性から見た外部所有構文と譲渡不可能性

所有構文は、世界のあらゆる言語に見られる普遍的な構文であるが、その表現形式や意味的範囲は言語によって大きく異なり、形態統語的にも多様な実現を示す（Heine, 1997）。一般に外的所有構文（external possession construction）とは、所有者と所有物の意味的な関係は、名詞句内ではなく、文のレベルで表現される構文を指す。具体的には、所有者が主語や与格名詞句などとして表現され、所有物はそれとは別の構成要素として表される。（Payne & Barshi, 1999）

外的所有構文は地理的・系統的に広く分布しており、たとえばフランス語や他のヨーロッパ諸語に見られる与格所有構文では、所有者が与格名詞句として、所有物が直接目的語として表現される。また、外的所有は名詞抱合の一類型や、韓国語に見られる二重目的語構文など、言語ごとに異なる構文的形式を通じても実現される。（Payne & Barshi, 1999）

詳細については第3節で改めて述べているが、本稿では、外的所有構文の中で、第一人称の行為者が主語として現れ、身体部位名詞のような典型的に譲渡不可能名詞が目的語として表されるタイプの外的所有構文に焦点を当てる。

Bickel & Nichols（2013）によると、譲渡不可能名詞と譲渡可能名詞が形態的に区別される言語は、244 言語中 43 言語にとどまり、全体の 17%を超えない。Nichols（1992）は、分析対象となった同地域の言語サンプルのうち、この二種類の所有を形式的に区別する言語は一つもなく、すなわち、ヨーロッパでは譲渡不可能性の区別はほとんど知られていないと述べている。また、Haspelmath（2001）も、譲渡可能な所有と譲渡不可能な所有の形式的区別が困難であることを、標準的なヨーロッパ言語の地域的特徴と見なしている。

しかし、先行研究によれば、譲渡不可能性は必ずしもこのような言語だけに関わるわけではないということである。Stolz 他（2008）は、譲渡不可能性が言語的特徴として全く非ヨーロッパ的と考えられてきたものの、実際にはヨーロッパ言語においても譲渡可能な所有と譲渡不可能な所有は区別され得ることを示している。その差異は必ずしも明確ではないものの、所有表現は所

有物の性質ではなく、有生性や具体性に影響されることもある¹。また、所有者と所有物の関係や視点の反転も、この差異に関連する要因として挙げられる。

Seiler (1983) は、所有のさまざまな表現における言語学的区別は、基本的に意味論的なものであり、言語の普遍的な性質として理解できると指摘している。さらに、言語によって譲渡不可能性の表現方法は異なり、基本的には二つの戦略がある：所有者を必須的に標示する方法と、所有者を省略する方法である。先行研究では、所有者を必須的に標示する言語の例として英語、所有者を省略する言語の例としてノルウェー語が挙げられている。(Thunes, 2013)

そこで、Seiler (1983) の所有戦略は、池上 (1981 など) の主観的・客観的把握の区別と構造的に対応している。このように、譲渡不可能性の形式的な区別や所有者の標示の有無は、単なる構文・形態の差異にとどまらず、所有関係の把握における話者の視点、すなわち主観性の現れとして理解できる。言語ごとに、所有者と所有物の関係をどのように概念化し、どの視点から言語化するかが異なるため、外部所有構文は主観性を検討するうえで特に有効な分析対象となると考えられる。

2. 2 主観性から見た身体部位を表す名詞

前節では外部所有構文について論じたが、本節では、身体部位名詞はどのように主観性と結びつくかを考察する。まず、Lehmann (2022) によれば、身体部位は物理的な対象ではあるものの、典型的な物体とは異なり、「環境から明確に区切られた」部分として定義され、全体に属する要素として認識される。多くの身体部位名詞は関係名詞の性質を示し、その全体は通常、人間の身体である。このことから、身体部位名詞が所有関係の分析において特別な役割を果たす可能性が示唆される。

さらに、譲渡不可能名詞の階層に基づく (Aikhenvald, 2013; Tsunoda, 1996; Nichols, 1988)、身体部位名詞は典型的に最上位に位置することが多い。したがって、言語に譲渡不可能性の区別が存在する場合、少なくとも身体部位名詞にはその区別が現れることが期待される。すなわち、身体部位名詞は通常、譲渡不可能名詞として扱われる傾向が強い。

Hopper & Thompson (1984) によれば、身体部位名詞は談話上の顕現性 (discourse salience) が低いため、譲渡不可能所有として扱われやすいことが示唆される。ここで興味深い対比が生まれる。すなわち、身体部位名詞自体は低い談話顕現性を示す一方で、それが属する人間という全体は高い談話顕現性を持つのである。

この「人間要素」は、主観性に関わる要素としても重要であり、特に英語のような客観的把握を好む言語では、その扱い方に影響を与える可能性がある。また、Stolz 他 (2008) が指摘する所有者昇格構文においても、特に身体部位や親族名詞の場合、所有者が節全体の主語として上昇する傾向が見られる。この場合、所有者は所有物の名詞を修飾するのではなく、節全体の主語として機能する。これはフランス語やロシア語においても確認される現象である (Nichols, 1988 参照)。

まとめると、主観性の高い言語では概念化者 (人間である話者) が背景化される傾向がある一方、客観性の高い言語では概念化者が前景化される傾向があることが確認される。さらに、身体部位所有表現においては、低い談話顕現性をもつ身体部位名詞と、相対的に高い談話顕現性をも

¹ 例えば、チェコ語において、情報構造 (information structure)、所有者が受ける影響の程度 (affectedness)、および譲渡不可能性が重要な要素であるが、affectedness が優先される。(Fried, 2009)

つ人間という全体が組み合わさった構造を扱うことになる。ここで所有者は同時に概念化者でもある事例を対象としており、Sailer (1983) の指摘に従えば、所有者の取り扱いには二つの可能性が存在する（所有者の明示的標示または省略）。

上述の議論に照らすと、所有表現においても、譲渡不可能所有に関して同様の傾向が認められる。特に、身体部位名詞は典型的に譲渡不可能名詞であるため、この傾向は身体部位所有構文においても明確に現れると考えられる。このことは、身体部位名詞の所有者の扱い（明示／省略）が、話者の前景化／背景化という主観性の指標と構造的に対応していることを示唆する。したがって、本研究では、身体部位所有構文における所有者の前景化・背景化の選択が、主観性とのように関連するかを検証する。

3. 分析

本稿では、身体部位名詞を含む外部所有構文を対象とし、話者が自分の部位に対して行動を起こし直接影響を及ぼす表現を分析する。3.1 節では分析対象言語の一般的な特性を示し、先行研究に基づく主観性の形態統語的指標を特定したうえで、予備的な主観性スケール上に位置づける。続く 3.2 節では、コーパス資料に基づき、身体部位名詞を含む外部所有構文を中心に比較分析を行う。

また、外的所有構文の中で、行為者の所有者が被害者の所有物に影響を与える構文に分析対象を限定している。このような構文は、所有者と所有物の関係が比較的明確であり、言語間比較を行う上でも対応関係を設定しやすいという点があるため、本研究の出発点として良いと考えられる。

一方で、主にヨーロッパ諸言語で観察される所有の与格構文のように、言語ごとに実現形式や制約が大きく異なり、比較はより複雑になる。例えば、チェコ語の「*Bolí mě hlava.*（直訳：頭に頭が痛い）」という表現は、日本語の「頭が痛い」やフランス語の「*J'ai mal à la tête*（直訳：私は頭に痛みを持っている）」など、所有物と所有者の主題役割が異なる表現が見られる。これらの構文は本稿の枠組みでは十分に扱うことができないため、今回は分析対象から除外し、今後の課題としたい。

上述した通り、主観性研究において所有表現と主観性の関係は、これまで主に叙述所有表現における他動詞・自動詞の対立に基づいて論じられてきた。しかし、日英対照研究を含む先行研究では、定冠詞の使用や省略など、他にもさまざまな形態統語的指標が主観性と関連づけて論じられている。また、所有表現は単純な HAVE/BE の分類に還元できるものではなく、その類型はより複雑であることも指摘されている（Heine, 1997; Stassen, 2013）。

そこで本稿では、叙述所有における BE/HAVE の類型を基盤としつつ、行為者・所有者の背景化・前景化または参照表現といった形態統語的指標を総合的に捉えることで、主観性の現れ方を考察することを試みた。ただし、本稿の分析対象および方法には一定の制約があり、所有表現の多様な類型と主観性との関係をより包括的に捉えるためには、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

3. 1 主観性の指標とスケール

この節では、各言語の一般的な特性を検討し、主観性の指標を特定した上で、言語を予備的なスケール上に位置づける。先行研究で述べたように、池上 (1981, 2011) は、主観性を示す形態統語的な指標としていくつかの特徴を挙げている。そこで、池上の議論を踏まえ、本稿で扱う所有表現に関連すると考えられる主観性の指標を指摘する。これらの指標をもとに、対象言語を予

備的な主観性スケール上に位置づけることを目的とする。

まず、分析対象となる言語（英語、フランス語、ロシア語、チェコ語、トルコ語、中国語、日本語、アイヌ語）の一般的な言語的特徴を表1でまとめた。本稿の対象言語は、主観性の研究で盛んに研究されてきた日本語と英語を根拠にし、それに加え、譲渡不可能性の形態的な区別はないフランス語とロシア語のような言語、または譲渡不可能名詞が存在する、アイヌ語などの言語、多様な分析対象を選択するようにした。これらの言語は系統的にも地域的にも多様であり、語順、形態的特徴、構文的傾向などの観点から、主観性の分析に先立って比較の前提となるだろう。

表1 分析対象言語の基本的特徴

言語	系統	語順	形態類型	譲渡不可能性
日本語	日本語族（孤立）	SOV	膠着語	なし
英語	ゲルマン語派	SVO	分析語	なし
アイヌ語	アイヌ語族（孤立）	SOV	抱合語	あり
フランス語	ロマンス語派	SVO	屈折語	なし
ロシア語	スラヴ語派（東）	SVO（可変）	屈折語	なし
チェコ語	スラヴ語派（西）	SVO（可変）	屈折語	なし
トルコ語	テュルク語族	SOV	膠着語	なし
中国語	シナ語族	SVO	分析語	なし

表1に示したように、対象言語は語順、形態類型において多様であるが、アイヌ語を除いて、いずれも譲渡不可能名詞が形態的に区別されていない言語である。

次に、これらの言語をより詳細に検討し、主観性の観点から比較するため、池上の理論に基づき形態統語的指標を設定する。まず、池上は代名詞の省略（Ikegami, 2008）、他動詞より自動詞を好む傾向（Ikegami 1991 など）、日本語の形容詞における一人称代名詞の制限（池上、2020）といった一般的な傾向を示している。そこで、データと予備分析に基づき、次の主観性の指標を特定した。

先行研究（Ikegami 1991）に基づき、日本語は一人称代名詞の主語を省略できる点で特徴的である。一方、英語では原則として主語の省略が許容されない。この違いは、日英語だけでなく、分析対象言語のすべてに関わると言える。

また、同じように、英語と日本語の異なる点は「discreetness」ということであり、単数形と複数形、不定冠詞・定冠詞、主語と動詞の人称一致などを指す。また、上記した（一人称代名詞の）主語省略、動詞の人称一致、動詞・名詞の数一致と不定冠詞・定冠詞の有無という4つの指標について説明したが、それ以外にもう一つ、叙述所有表現の種類のカテゴリーが含まれている。これは、分析対象言語が所有の文脈で話者を前景化して他動詞を用いる傾向があるのか、それとも話者を背景化して自動詞を用いる傾向があるのかを確認するためである。

次に、これらの指標に基づき、各言語を予備的な主観性スケール上に位置づける。

表 2 予備的な主観性スケール

	主語省略	単複形	冠詞	人称一致	叙述所有 ²
英語	なし	あり	あり	あり	HAVE
フランス語	なし	あり	あり	あり	HAVE
チェコ語	あり	あり	なし	あり	HAVE
アイヌ語	あり	あり	なし	あり	HAVE
ロシア語、トルコ語	あり	あり	なし	あり	BE
中国語、日本語	あり	なし	なし	なし	BE

表 2 は、筆者による整理した予備的な主観性のスケールである。各言語を最も客観的なものから最も主観的なものへと並べてみた。示した形態統語的特徴のうち、主語省略、単複形の有無、冠詞の有無、人称一致の点は、概念化者あるいは行為者・所有者の表現に関わる点において、背景化と密接に関係する指標である。ただし、各言語において利用可能な形態統語的資源は異なる。一方、叙述所有の区別は、個別の背景化手段というよりも、所有表現の類型的性質を示す一般的な区分として位置づけられる³。

英語が最も客観的であり、日本語と中国語が最も主観的であることが示されている。ただし、以上の各言語が実際にどれほど客観的または主観的であるかを正確に反映していない。上記の指標に基づいてある主観性の傾向を予測することは可能であると考えられるが、より正確な結果は談話分析によって得られると思われる。

3. 2 コーパス分析の基本的なパターンの分類

本節では、コーパスに基づく分析を行い、前述の通り、外部所有構文における身体部位名詞、話者が自分の身体部位に影響を及ぼす表現に焦点を当てた。コーパスデータは主に「InterCorp v. 16ud」(Čermák & Rosen, 2012) から収集し、「SketchEngine」(Kilqarriif et al., 2014) で補完した。さらに、アイヌ語⁴ (中川他, 2016–2024; 国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ)、トルコ語 (Aksan 他, 2012)、ロシア語 (Savčuk et al., 2024) の追加資料で補完した。収集したデータはほとんど小説であり、「Sketch Engine」の追加資料はインターネットの記事や投稿のデータである。データ全体の件数については、言語ごとに 1500 文を収集し、身体部位名詞ごとに 300 文を収録した。

² 表 2 の叙述所有の区別は、主に WALS の分類 (Stassen, 2013) に基づき、各言語における所有構文の主要な類型に焦点を当てている。その結果、ある言語において主要な類型とは異なる述語を用いる表現が存在する可能性がある。これは主にアイヌ語とロシア語において見られる。

³ 本稿で扱う主観性や離散性に関する一般的な傾向は、各言語において利用可能な形態統語的特徴として具体化されることが考えられる。ただし、どの形態統語的特徴が主観性とどのように結びつくのかについては、先行研究においても統一的な見解が確立されているわけではないが、特に、人称一致を伴う言語においては、主語が省略された場合であっても、行為者に関する文法情報が動詞形態に保持されるため、完全な背景化が達成されないことがある。このことは、主語省略と人称一致がいずれも背景化に関与する重要な特徴でありながら、その作用の仕方は異なることを示している。

⁴ アイヌ語データは北海道方言、主に沙流方言と千歳方言に基づく。

まず、概念化者の話者は自分の身体部位の目的語に対して行動を行い、身体部位が独立した部分のように直接の影響を受ける（ほとんどの場合は動く）という表現は、ある程度すべての調査対象言語に現れることが確認できた⁵。分析に際しては、以上に設定した主観性の形態統語的指標と、概念化者の表し方を中心に検討を行った。

また、分析した文の概念化者の発現を考慮し、分析の上で、動詞句内の「行為者要素」、つまり行動を起こす要素と名詞句内の「所有者要素」を指摘し、この二つの点に焦点を当てた。なぜなら、主体としての話者と所有者としての話者との間には差異があると考えられる。所有物が自身の身体の一部であれば、本質的に主観的であると見なせるものである以上、「行為者」の扱いと「所有者」の扱いの差異は顕著であった。それに基づいて、以下の五つのパターン（1A、1B、2、3、4）に分類できることが分かった。

3. 2. 1 パターン 1A

パターン 1A は、全てのパターンの中で最も客観的な型と見なすことができる。特に英語において典型的に現れ、対象言語の中でもきわめて特徴的である。このパターンでは、行為者と所有者の両方が明示的に表され、いずれも省略が不可能である。

- (3) I laid my hands on his shoulders and rested my chin on his head.
私は彼の肩に手を置き、あごを彼の頭に載せた。
- (4) I opened my eyes wide, glared into the dark, seeking the shape of his body on the floor.
私は目を見開き、暗闇を睨みつけ、床に横たわる彼の体の輪郭を探した。
- (5) I rested my head against the window.
私は窓に頭を寄りかからせた。

以上の例では、英語の表現の典型的な例が見られる。一人称の行為者は必ず「I」で表され、所有者は「my」で表される。行為者と所有者はともに言語化され、省略は基本的に許されない。また、本研究で扱われている他動詞の場合は、英語において、現在形で一人称と二人称を区別せずに、三人称が接尾辞「-s」によって区別される。過去形では、人称による区別はない。

以上のような文では、概念化者が言語化する「行為者」の言及は代名詞のみであろう。それは、パターン 1 の特徴であるかもしれない。パターン 1A が最も客観的であると提案する。主語が省略されないため、発話において常に前景化され、プロミネンスが高い、つまり、顕現性が高いためである。

ただし、このグループで扱われている言語は現時点で英語のみである。同様の特徴を持つ他の言語についても今後分析することが望ましい。将来的にこのグループに属すると考えられる言語の一つがオランダ語である。例えば、「Ik opende mijn ogen. (私は目を開けた)」では、動詞 *opende* (開けた) は人称によって形が変化せず、主語 *Ik* (私) と所有者 *mijn* (私の) のみが変化

⁵ この点については議論でさらに詳述するが、このような表現が全ての言語で観察されるというのは、必ずしもそれらが全て同じ方法と頻度で使われているわけではない。しかしながら、おそらく話者の自己が自身の身体部位から一定の距離を置くことを伴い、他のタイプの外部所有とは区別できると考えられる。それ自体で興味深く、特別な現象であるかもしれない。

フダー クラーラ 主観性から見た外部所有構文における身体部位名詞の表現をめぐって—多言語的・類型論的視点から—
する。

3. 2. 2 パターン 1B

パターン 1B は 1A と同じように、行為者と所有者は両方明示的に表現される。しかしながら、このパターンを示す言語であるトルコ語とアイヌ語では、「行為者」は動詞の接辞⁶で言語化される。この場合、行為者は文内で動詞の人称標識として表される。トルコ語では、譲渡可能名詞と譲渡不可能名詞の区別は明確ではないが、「possessive-genitive」、所有格・属格構文（PG 構文）が頻繁に用いられ、所有者は属格接辞で、所有物は所有格（POSS）接辞で標示される。さらに、この二重の標示は身体部位名詞に限定されず、一部の名詞は所有者と所有物とどちらかが標示を取る場合、あるいは、標示を全く取らない場合がある。これは文脈と所有される名詞に依存する。（Öztürk & Taylan, 2016）

また、アイヌ語は譲渡可能名詞と譲渡不可能名詞を区別する言語であり、対象言語の中で唯一である。譲渡不可能名詞には、概念形と所属形があり、概念形は一般的な概念を表しており、所属形は全体の一部、つまり、特定の対象との関係を表す。また、譲渡可能名詞は人称接辞により標示される。（Tamura 2000, Sato 1997）

まず、(6) から (8) まで、トルコ語の例が挙げられる。

- (6) Bacaklarımı biraz uzatayım.
legs-1SG.POSS-ACC a.little let's.stretch.1SG
足を少し伸ばそう。
- (7) Titrediklerini düşündüğüm için
trembling-PL-3POSS-ACC thinkthing-1SG.POSS because
ellerimi cebimden çıkarmıyordum.
hands-1SG.POSS-ACC pocket-POSS-ABL didn't.take.out-1SG
(私の手が³) 震えていると (私は) 思ったので、ポケットから手を出さなかった。
- (8) Yüzüme elimden geldiğinde zavallı
face-1SG.POSS-DAT hand-1SG.POSS-ABL as.it.comes pitiful
görülecek şekilde boyadım.
to.be.seen in.a.manner painted-1SG
(私は) できるだけ情けなく見えるように (私の) 顔を塗った。

トルコ語では、所有接辞が頻繁に使われており、以上の例では、身体部位の名詞だけでなく、「(手の) 震え」などでも現れる。「足」や「手」の場合、所有接辞の上、所有物が一人称の接辞も取る。そこまでは、パターン 1A と同じように、所有者が必ず表現される。ただし、英語とは異なり、トルコ語とアイヌ語の例では、人称は必ず動詞で表されるため、行為者も明示的であるが、英語とは異なる。ただし、英語における省略不可能の人称代名詞主語（節頭位置）が、アイヌ語やトルコ語における動詞の人称標識とは主観性の点で差異を示すかどうかは明らかではない。

⁶ アイヌ語において、一人称単複数、二人称単複数といわゆる不定人称の接辞がある。人称代名詞も存在するが、その使用頻度は低い。（佐藤、2008）本研究のデータでも、行為者は人称接辞で表現され、人称代名詞が使用した文は一つもなかった。

- (9) aep puyar kari turiri rapokke onuytasa
 food window from hold.out while in.turns
 a-tekehe a-turi tek hine...
 1SG-hand-POSS 1SG-stretch quickly and
 食べ物を窓から差し出した瞬間に手をさっと伸ばして…
- (10) konto kuneywa cise kor kamuy tonono a-teke
 then morning house have god lord 1SG-hand.POSS
 a-kikkik akusu ek...
 1SG-clap when come
 朝になって手を叩いたら、家の主人が来た。

上述したように、アイヌ語では、譲渡可能名詞と譲渡不可能名詞の区別が存在する。トルコ語と異なり、所有接辞を取るのは譲渡不可能名詞のみであり、譲渡可能名詞の所有を表す時、所有接辞や人称接辞ではなく、「kor」という「持つ」を意味する動詞が使用され、例えば以上の a-teke 対して「ku=kor seta (私が持つ犬)」のような例が挙げられる。(佐藤、2008 参照)

(9) から (11) の例は、トルコ語の例に似ている性質が見られる。まず、所有した身体部位の名詞には、人称接辞と所有接辞があり、伸ばすという動詞も一人称接辞を取る。

- (11) sine ancikar hotke-an akusu, a-sapa
 one night sleep-1SG when 1SG-head.POSS
 sirka ta a-anu kor hinak un hekaci
 ground at 1SG-put when where at child
 cis haw a-nu wa kusu,
 cry voice 1SG-hear and because
 hepuni-an kor somo a-nu.
 raise.head-1SG when not 1SG-hear
 ある晩横になっていると頭を床につけると、どこからか子供の泣く声が聞こえるので、頭を上げると聞こえなくなる。

3. 2. 3 パターン2

パターン2では、行為者は必ず一人称主語代名詞によって表現され、省略できない。これはパターン1Aと同様である。しかし、パターン2では、所有者は所有代名詞や人称接辞ではなく、定冠詞などの要素によって表現される。パターン2の典型的な例がフランス語である。フランス語では理論上、所有代名詞も使用可能だが、定冠詞の使用が優勢である。

- (12) Je fermai les yeux, me cachai
 I closed.1SG DEF.PL eyes REFL.1SG hid.1SG
 derrière mes mains.
 behind my hands.
 私は目を閉じ、両手で顔を覆った。

(12) では、所有者が定冠詞と人称代名詞の両方で表現されていることが観察できる。定冠詞

は一人称に限定されない。(13) でわかるように、同じ定冠詞を用いて三人称の所有者と所有される名詞を結びつけることができる。パターン 2 では、背景化された要素が所有者であると我々は主張する。トルコ語やアイヌ語では主語が動詞に明示されたままであり、フランス語の定冠詞はあらゆる種類の所有者を指し得るため、背景化はパターン 1B より強い。

- | | | | | | |
|------|-----------|------------|--------|-------|------|
| (13) | Elle | ferma | les | yeux. | |
| | She | closed.3SG | DEF.PL | eyes | |
| | 彼女は目を閉じた。 | | | | (作例) |

したがって、パターン 2 がパターン 1A および 1B よりも主観性が高いと提唱する。前述したように、パターン 1B は行為者の背景化によって特徴づけられる。本研究のデータでは、「mes」のような所有形容詞が使用された例文はごくわずかであり、ほとんどは話者の身体部位と別の人物の身体部位の区別が必要な場合であった。

- | | | | | | | | |
|------|----------------------------------|---------------|----------|--------------|-------|-----------|------|
| (14) | Je | tournai | la | tête | comme | averti | |
| | I | turn-PST.1SG | the | head | as | warn.PTCP | |
| | que | quelque chose | se | passait | | derrière | moi. |
| | that | some thing | REFL | is.happening | | behind | me |
| | 私は何かが背後で起きていることに気づいたかのように、振り返った。 | | | | | | |
| (15) | J | 'ai levé | la | main | et | ai | |
| | I | have raised | DEF.SG.F | hand | and | have.PRS | |
| | commandé | un | | quatrième | | cognac. | |
| | ordered | INDEF.SG.M | | fourth | | cognac. | |
| | 私は手を挙げて、4 杯目のコニャックを注文した。 | | | | | | |

所有者を指す定冠詞の頻繁な使用に加え、フランス語には、省略できない一人称代名詞の主語と、動詞の一人称接辞の両方が存在することがわかる。そこで、主観性から見れば、行為者が明示的に表れる。ただし、所有の NP 構造では、所有者が背景化する。そのため、パターン 2 をパターン 1B よりも主観性のスケールで上に位置付ける。ただし、このパターンで検証対象となった言語はフランス語のみであるため、同じような性質を持つ言語、例えば上述したノルウェー語やスペイン語とイタリア語などは、今後より詳しく分析する必要がある。

3. 2. 4 パターン 3

本研究におけるパターン 3 の代表例としては、チェコ語、ロシア語そして中国語が挙げられる。これらの言語は、所有者の完全な省略によって特徴づけられる。しかしながら、チェコ語とロシア語はスラヴ語族の異なる語群に属しており、同様に本論文で論じた構文の扱い方もわずかに異なる。また、中国語も比較的特徴的である。

- | | | | | | |
|------|--------------|---------|------|-------|---------------|
| (16) | Zabořím | obličej | do | trávy | zasypané |
| | bury.FUT.1SG | face | into | grass | covered. PTCP |
| | hrudkami | hlíny. | | | |
| | clumps | soil | | | |

- 私は土の塊で覆われた草の中に顔を埋める。
- (17) Ponořil jsem ruku do studené
submerge. PST. SG. M AUX.1SG hand into cold
vody.
water
私は冷たい水に手を浸した。
- (18) Zavřel jsem oči a očekával
close.PST.3S.M AUX.1SG eyes and expect.PTS.SG.M
jsem úder strašných vod.
AUX.1SG blow terrible waters
私は目を閉じて、恐ろしい水の衝撃を待った。

チェコ語の例から、この言語には二つの重要な特徴がある。まず、パターン3の特徴的な所有者が省略される。以上のパターンとは異なり、所有者という要素は完全に背景化されている。NP内の主観性を検討すると、これらの言語では所有者の表現が最大限に主観的であると結論づけられる。ただし、文全体としては、必ず明示される行為者は残っており、完全に主観的とは言えない。

また、ロシア語における所有者の背景化は、以下に示すようにチェコ語と同様である。

- (19) Ja vstal, na oshhup' nashel
I got.up.SG.M by touch found.SG.M
klochok vaty na polke, obter vlazhnym
piece cotton on shelf wiped.SG.M wet
tamponom lico i leg navznich' na krovat'.
swab face and lied.SG.M face.up on bed
私は立ち上がって棚の上で綿棒を見つけ、濡れた綿棒で顔を拭いてベッドに仰向けになった。
- (20) Ja otкрыla glaza i uvidela kartinu.
I opened.SG.F eyes and saw.SG.F picture.
私は目を開けると、絵を見た。

上記の例が示すように、チェコ語とロシア語では、人称主語の省略の頻度が異なる。原則としてロシア語とチェコ語では人称主語の省略が可能だが、ロシア語のデータでは、ほとんどの主語は省略しない。(21)は、一人称主語が省略されている文の一例である。上記の例と(21)は時制が異なり、本研究で分析したロシア語のデータでは、現在形の文における代名詞を省略する傾向がより強かった。一方、過去形の文で、主語の省略の例は一つもなかった。この点については、ロシア語の過去形動詞が人称標示を行わないという形態的制約が関与していると考えられる。すなわち、主語を省略した場合、行為者に関する文法情報が保持されないため、過去形では主語の省略が起こりにくい。

- (21) Ne otkryvaya glaz, sveshivayu nogi s posteli,
NEG open.PTCP eye hang.1SG legs off bed

vstryakhivayu	golovu:	tyazhela
shake.1SG	head	heavy
posle	vcherashnego.	
after	yesterday.	

目を開けずにベッドから足をぶら下げ、首を振る：昨日のせいで重い気がする。

少なくとも本研究で分析した構文においては、ロシア語では行為者の要素がより強く背景化される傾向が観察された。この差異には、ロシア語の過去形における人称標示の欠如といった形態統語的制約と主観性の関係をより深く考慮すべきである。チェコ語の表現は、テンスに関わらず一人称主語の省略が見られるが、ロシア語の文には、テンスによってかなり大きな差が発生する。この特徴が主観性と関連しているかどうか、また関連しているならばどのような形で関連しているのかは疑問であり、この点については、通時的観点や他の構文との比較を含め、主観性との関係をより広い視野から検討することが今後の課題である。

要するに、両言語は同じパターンに属するものの、チェコ語の方が行為者の要素を背景化する傾向が強いため、全体としては、チェコ語の方がロシア語より主観性が高いと考えられる。ただし、この差異については、スラヴ語族諸言語と同様の構造を持つ言語との比較、ならびにロシア語におけるテンスによる相違を含め、より深い分析を行うことが今後の課題である。

指標上では日本語と中国語は類似する傾向が予想されるが、実際のデータでは異なる傾向が観察された。データから明らかになったのは、主語が実際に省略されるケースが極めて稀であった点である。先行研究（中谷、2024）でも、中国語では英語のように主語を表す傾向が強いことが確認された。

- (22) 我把手放進他手中時，一面揣摸他是誰。

wǒ	bǎ	shǒu	fàngjìn	tā	shǒuzhōng	shí,
1SG	BA	hand	put-enter	3SG	hand-middle	when
yīmiàn		chuǎimō	tā	shì	shuí	
at.once		speculate	3SG	COP	who	

彼の手の中に私の手を入れたとき、私は（それと同時に）彼が何者なのか考えた。

(22) では、主語である一人称の行為者要素が省略されない。（これは英語やフランス語の例で見たものと類似しているが、二つ目の節では主語を繰り返し表現する必要はないようである。）本研究のデータでは、収集した文の 90% 以上は一人称主語が明示的に表現されている。一方、ロシア語とチェコ語と同様に、所有者要素は言語化されない。

- (23) 我搖搖頭，說我認為她不會了。

wǒ	yáo yáo	tóu,	shuō	wǒ	rèn	tā
I	shake-shake	head	say	I	think	she
bù huì	liǎo.					
cannot	PFV					

私は首を振って、（彼女はそういうことをすること）は思わないと言った。

- (24) 於是，我就用袖子擦擦眼睛，止住了自己。

yúshì	wǒ	jiù	yòng	xiùzǐ	cā cā	yǎnjīng
-------	----	-----	------	-------	-------	---------

then I then use sleeve wipe-wipe eyes
 zhǐzhù liǎo zì jǐ 。
 hold.back PFV self
 そこで、私は袖で目をぬぐい、気を取り直した。

所有者要素を省略しつつ行為者要素を保持する傾向は、コーパス全体を通じて一貫している。中国語は日本語と一部の特性を共有しているが、前述のように、中国語の表現は英語と非常に類似していることが示されているようである。本研究の対象にした所有構文の場合、所有者の要素が言語化されないため、英語よりも主観的な傾向が強いと主張する。

3. 2. 5 パターン4

本研究においては、日本語はパターン4に位置される。日本語では、先行研究で確認された通り、主語の省略による行為者の背景化とともに、所有者の要素を背景化する傾向も強くある。

(25) 目を閉じ、目を開け、もう一度時計の時刻と日にちを確認する。

上記の例は、池上(1981など)による言語の主観的把握の強い好みに関する分析と関連している。行為者と所有者を別個の存在として考えると、日本語では、概念化者が主観的表現を好み、行為者と所有者の両方が背景化される。また、主語の省略と所有される名詞の性質がそれを許すため、行為者と所有者の両方が完全に暗示される。

(26) 僕は窓に顔をつけ、知らない土地の風景を熱心に眺める。

ただし、(26)で分かるように、主語の省略が常に起こるわけではない。コーパスデータでは、主語が省略された文は70%を超えるが、日本語話者が常に主語を省略するとは言いがたく、話題転換が起きない場合でも行為主語が明示される(そして前面に出される)こともあった。こうした事例は比較的稀に思われるが、主題を明示的に述べることは、話題転換以外の場面でも前景化を図る手段として用いられているようだ。本研究のデータは主に書かれたテキスト、具体的には小説で構成されている。

4. まとめとスキーマの定義

本研究では、類型学的に異なる8言語において、外部所有構文における身体部位名詞の表現を検証した。コーパス分析の結果、「行為者要素」および「所有者要素」を定義し、所有表現の言語間の差異を示した。身体部位名詞のような典型的に譲渡不可能名詞の所有表現における差異を観察することが可能であると提案した。また、所有表現の5つのパターンを特定し、その中でもタイプ3が最も頻繁であった。

表3 外部所有構文における身体部位名詞の表現の5つのパターン

	行為者要素	所有者要素	参照点	パターン
英語	前景	あり	—	1A
アイヌ語	背景	あり	—	1B
トルコ語	背景	あり	—	1B
フランス語	前景	なし	あり	2
チェコ語	背景	なし	—	3
ロシア語	前景	なし	—	3
中国語	前景	なし	—	3
日本語	背景	なし	—	4

表3はそのパターンを示したものである。パターン1Aと1Bでは、行為者要素と所有者要素が両方言語化される。英語では、行為者は一人称代名詞によって言語化され、前景化される。同様に、所有者の言語化も前景化と見なすことができる。行為者の前面化により、英語を個別のパターンに分類する。

ただし、英語は主語省略言語とは見なされないものの、特に一人称代名詞の主語の省略は書き言葉と話し言葉でも観察された。(Haegeman & Ihsane, 2001; Wagner, 2016) 本研究のデータにおいて、英語の文の中で主語省略が見られなかったため、英語はパターン1Aの典型例と見なされている。トルコ語とアイヌ語はパターン1Bに分類され、パターン1Aと類似した特性を共有すると考えられている。ただし、パターン1B言語では、行為者が一人称代名詞ではなく動詞で表される。アイヌ語とトルコ語はどちらもSOV言語であり、所有される身体部位は常に動詞の前に置かれるため、行為者要素は背景化されることを提案する。

行為者要素が一人称代名詞と動詞接辞を通じて表現されることとその主観性との関係を考慮することが重要であろう。いずれの場合も話者が言語化されるため、どちらがより客観的であるかを判断するのは困難だと考える。トルコ語とアイヌ語が一人称接辞を省略することは不可能であり、英語も以上に示したように主語を省略することは稀である。そのため、パターン1Aと1Bを同一タイプの表現の変種として記述し、これら両方のパターンを含む以図1のスキーマ⁷を提案した。

⁷ ここで、Cというのはconceptualizer、概念化者を指す。大きな楕円は文全体を表し、小さな楕円は名詞句を表す。Aは「actor」または行為者の要素を、Pは「possessor」または所有者を表す。Oは「object (of possession)」、すなわち所有物を表す。最後に、Rは「reference point」、参照点（例えばフランス語の定冠詞など）を表す。点線は参照関係または非物理的関係を指す。実線は直接的な影響を与える行為ということである。

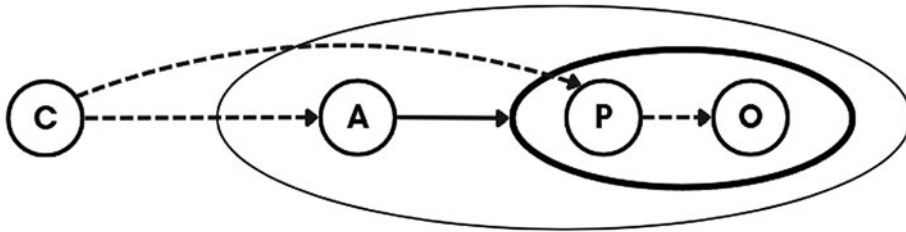


図1 スキーマ1

本稿では、フランス語のみがパターン2に分類されるが、前述の通り、イタリア語やスペイン語、ノルウェー語、デンマーク語、ドイツ語など多くのヨーロッパ言語も同様の挙動を示すと推測される。

- (27) Cierro los ojos y no pienso en nada.
close.1SG DEF eyes and NEG think about nothing.
目を閉じて、何も考えない。
- (28) Ich mache die Augen zu und denke an
I make.1SG DEF eyes closed and think.1SG about
nichts.
nothing.
目を閉じて、何も考えない。
- (29) Hun løftet haken.
she raised chin.DEF
彼女は顎を上げた。
- (Thunes, 2013)

(27) と (28) では、InterCorp から収集したスペイン語とドイツ語の例文、(29) では先行研究に挙げられたノルウェー語例文が見られる。ドイツ語とデンマーク語の例ではフランス語のように、一人称主語は明示的に表現され、所有者は「参照点」である定冠詞によって表現される。一方、スペイン語では、行為者は動詞で現れ、チェコ語とロシア語と同じであろう。スペイン語が参照点を利用する別のパターンに分類される可能性があると考えているが、その点については今後分析してゆくことが必要である。フランス語の分析に基づき、パターン2に対応するスキーマを図2に提案する。

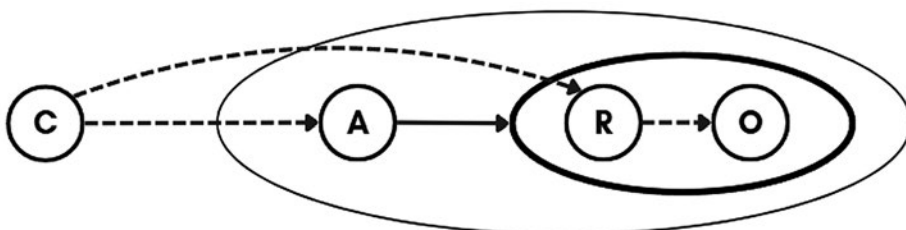


図2 スキーマ2

パターン3については、チェコ語、ロシア語と中国語を特定した。ロシア語と中国語では、一人称代名詞を用いて主語を前景化する傾向があり、所有者を言語化しない傾向があることを示した。また、チェコ語では代名詞を省略する傾向が強いものの、行為者要素は動詞で表現される。データに基づけば、ロシア語はチェコ語よりも客観的な表現に傾いていると考えられる。同時に、中国語では文法的には異なるものの、より客観的な表現傾向も見られ、先行研究においても確認できた。

したがって、図3のスキーマ3の特質は、行為者要素が言語化される一方で、所有者要素が所有代名詞や定冠詞主語のような「参照点」によって参照されるのではなく、省略される点にあると提案する。

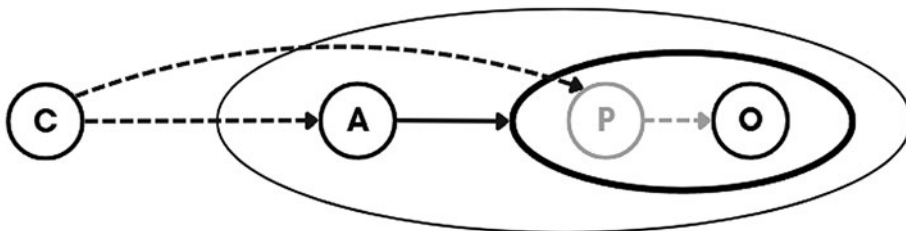


図3 スキーマ3

最後に、パターン4では、行為者要素とも所有者要素とも言語化されない。以下の図4でスキーマ4を示す。本研究において、日本語の主語が省略されない場合も見られるが、それらは主に話題転換に関連している。フランス語と同様に、このパターンで確認されている言語は日本語のみであるため、今後の課題は、本稿で検討された表現をより多くの言語で検討し、パターン4の言語の特徴を詳しく記述することである。

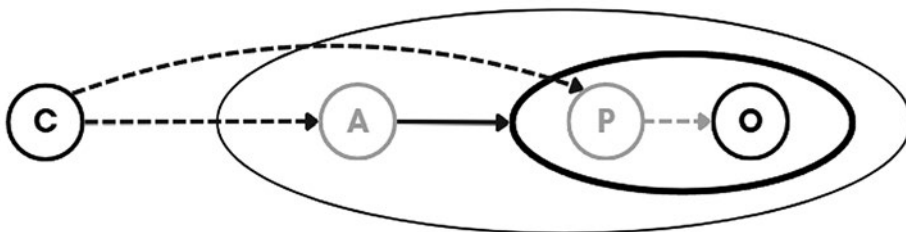


図4 スキーマ4

5. 結論

本論では、身体部位名詞を中心とした所有表現に注目し、主観性の形態統語的指標を定義しながら各言語の所有表現と主観性との関連を明らかにすることを目的とした。まず、先行研究による主観性の指標を参照し、各言語の主観性の特徴を整理した上で、英語、フランス語、チェコ語、ロシア語、中国語、日本語、トルコ語およびアイヌ語を対象に比較分析を行った。

その結果、事態を言語化する概念化者の視点から、概念化者の表現を「行為者」と「所有者」という二つの要素に分け、その表現の仕方に基づき、5つの所有表現パターンを特定した。行為

者・所有者の両方を明示するパターン1Aは最も客観的把握が好まれる傾向が強いことを示し、逆に、両者を省略するパターン4は、最も主観的把握が好まれる傾向が強いことが明らかになった。また、フランス語のように定冠詞によって所有関係を示すタイプ（パターン2）は、行為者が言語化され、所有者は「参照点」で表されることが示された。また、パターン3の言語では、行為者が言語化され、所有者は言語化されないことが明らかになった。

本稿の目的は、Sailer (1983) が提案した所有者への二つの戦略に基づき、各言語における身体部位所有表現の分析結果とその戦略、そして主観性との関係を検討することで、所有者の明示的・暗示的な表現と主観性との関連を明らかにすることであった。その結果、Sailer の理論は概ね妥当であることが確認された。すなわち、英語、トルコ語、アイヌ語のようにより客観的と見なされる言語では、所有者要素が言語化される傾向が強く、一方で日本語、中国語、ロシア語、チェコ語では、所有者は背景化される傾向があった。また、興味深いことに、行為者要素と所有者要素の表現にはかなり大きな差が観察され、所有者の背景化・明示化と行為者の扱いが必ずしも一致しないことが示された。

この行為者要素と所有者要素の不一致は、所有者と所有物名詞の関係性に起因する可能性がある。言語ごとに異なる名詞の種類が異なる扱いを受ける場合があるなら、この点は今後の研究課題として残される。

本研究にはいくつかの課題が残されている。第一に、本稿では、調査対象となった言語に共通する特定の表現に焦点を当てた。しかし、これらの表現がどの程度談話で使用されているかという疑問は残されている。また、分析対象を「手を挙げる」型の構文に限定したため、他の構文（例えば「頭が痛い」型の構文など）についても検討する必要がある。第二に、主観性の指標が主に英語と日本語を基盤として設定されているため、アフリカ諸語やオーストロネシア諸語など、典型的に異なる言語を取り入れた再分析が望ましい。

最後に、本研究の分析において、日本語およびアイヌ語における身体部位の名詞＋動詞の構造が少数ながら確認された。これらの例の頻度は高くないものの、いずれも行為の対象となる身体部位の名詞が自動詞または他動詞に取り込まれる。特にアイヌ語の場合、所有関係が所有接辞を通じて保持される。これらの表現の多くは慣用的なものではあるが、一部には慣用的でない使用例も確認されており、この問題をさらに発展させることを課題としたい。

参考文献

- Aikhenvald, A. Y. (2013). Possession and ownership: A cross-linguistic perspective. In Aikhenvald & Dixon (eds). *Possession and Ownership: Explorations in Linguistic typology*. 1-64.
- Bickel, B., & Nichols, J. (2013). Obligatory possessive inflection. In M. S. Dryer & M. Haspelmath (Eds.), *WALS Online (Version 2020.4) [Data set]*. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.13950591>
Retrieved from <http://wals.info/chapter/58>
- Fried, M. (2009). Plain vs. situated possession in Czech: A constructional account. In *The Expression of Possession* (pp. 213-248). Berlin, New York: De Gruyter Mouton. <https://doi.org/10.1515/9783110213232.213>
- Haegeman, L., & Ihsane, T. (2001). Adult Null Subjects in the non-pro-drop Languages: Two Diary Dialects. *Language Acquisition*, 9(4), 329-346. https://doi.org/10.1207/S15327817LA0904_03
- Heine, B. (1997). *Possession: Cognitive Sources, Forces, and Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Hopper, P. J., & Thompson, S. A. (1984). The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar. *Language*, 60(4), 703-752.
- Ikegami, Y. (1991). 'Do-language' and 'become-language': two contrasting types of linguistic representation. *The empire of signs: semiotic essays on Japanese culture*, p. 285-326. John Benjamins.
- Ikegami, Y. (2007). Subjectivity, Ego-orientation and Subject-Object Merger: A Cognitive Account of the Zero-Encoding of the Grammatical Subject in Japanese. In: *Japanese Linguistics European Chapter*. Kuroshio Publishers. p. 15-30
- Isačenko, A. 1974. On Have and Be Languages: A Typological Sketch. In: Flier, M. (ed.), *Slavic Forum: Essays in Linguistics and Literature*, 43-77, The Hague: Mouton.
- Lehmann, C. (2022). Foundations of body-part grammar. In R. Zariquiey & P. M. Valenzuela (Eds.), *The grammar of body-part expressions: A view from the Americas*. Oxford University Press.
- Nichols, J. (1988). On alienable and inalienable possession. In W. Shipley (ed.), *In Honor of Mary Haas: From the Haas Festival Conference on Native American Linguistics* (pp. 557-609). Mouton de Gruyter.
- Nichols, J. (1992). *Linguistic diversity in space and time*. Chicago: Chicago University Press.
- Öztürk, B., & Taylan, E. E. (2016). Possessive constructions in Turkish. *Lingua*, 182, 88-108. <https://doi.org/10.1016/j.lingua.2015.08.008>
- Payne, D. L., & Barshi, I. (1999). External possession. In *Typological Studies in Language* (pp. 3-32). John Benjamins. doi:10.1075/tsl.39.03pay
- Sato, T. (1997). Possessive Expressions in Ainu. In T. Hayashi & P. Bhaskararao (Eds.), *Studies in PossessiveExpressions* (pp. 143-160). Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Seiler, H. (1983). Possession as an operational dimension of language. Tübingen: Narr
- Stassen, L. (2013). Predicative Possession (v2020.4). In M. S. Dryer & M. Haspelmath (Eds.), *The World Atlas of Language Structures Online*. doi:10.5281/zenodo.13950591
- Stolz, T., Kettler, S., Stroth, C., & Urdze, A. (2008). Split Possession. In *Studies in Language Companion Series*. John Benjamins Publishing Company.
- Tamura, S. (2000). *The Ainu language*. Tokyo: Sanseido.
- Tsunoda, T. (1996). The possession cline in Japanese and other languages. In H. Chappell & W. McGregor (Eds.), *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation* (pp. 565-630). Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Thunes, M. (2013). The inalienability pattern of English and Norwegian. *Bergen Language and Linguistics Studies*, 3(1), 167-178. <https://doi.org/10.15845/bells.v3i1.369>
- Wagner, S. (2016). Never saw one - first-person null subjects in spoken English1. *English Language and Linguistics*, 22(01), 1-34. <https://doi.org/10.1017/s1360674316000216>
- 池上嘉彦. (1981). 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦 (2008). 「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」、『日本語言文化研究』8、1-6
- 池上嘉彦. (2011). 日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉. *人工知能*, 26 (4)、317-322. https://doi.org/10.11517/jjsai.26.4_317
- 池上嘉彦 (2020). 「事態把握」『認知言語学』ひつじ書房 1-22

佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京：大学書林.

中谷博美 (2024). 中国語の主観性に関する考察—日英語の表現構造との比較から—, 人間文化 (57)、43-48.

コーパス資料

Aksan, Y., Aksan, M., Koltuksuz, A., Sezer, T., Mersinli, Ü., Demirhan, U. U., Yilmazer, H., Atasoy, G., Öz, S., Yıldız, İ., & Kurtoglu, Ö. (2012). Construction of the Turkish National Corpus (TNC / Türkçe Ulusal Derlem / TUD) [Corpus]. In Proceedings of the Eighth International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC'12), Istanbul, Turkey.

Čermák, F., & Rosen, A. (2012). The case of InterCorp, a multilingual parallel corpus. *International Journal of Corpus Linguistics*, 17(3), 411-427.

Kilgarrieff, A., Baisa, V., Bušta, J., Jakubíček, M., Kovář, V., Michelfeit, J., Rychlý, P., & Suchomel, V. (2014). The Sketch Engine: Ten years on. *Lexicography*, 1, 7-36.

Savčuk S. O., Arhangel'skij T. A., Bonč-Osmolovskaja A. A., Donina O. V., Kuznecova Ju. N., Ljaševskaja O. N., Orehov B. V., Podrjadčikova M. V. (2024) Nacional'nyj korpus russkogo jazyka 2.0: novye vozmožnosti i perspektivy razvitija. *Voprosy jazykoznanija*, 2, 7-34.

中川裕、アンナ・ブガエワ、小林美紀、吉川佳見. (2016-2020) 「アイヌ語口承文芸コーパス—音声・ゲロス付き—」、〈<https://ainucorpus.ninjal.ac.jp/>〉、国立国語研研究所.

「国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ」、〈<https://ainugo.nam.go.jp/>〉、国立アイヌ民族博物館、公益財団法人 アイヌ民族文化財団

(フダー クラウラ・北海道大学言語科学研究室・博士後期課程)